

---

# さあ人生を楽しもう

たんそくレトリバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さあ人生を楽しもう

### 【Nコード】

N4287Z

### 【作者名】

たんそくレトリバー

### 【あらすじ】

平和で無害に生活していた男が気がついたら異世界に、  
だけど気にすることもなく異世界で平和に生きていく話。（本人談）

だが異世界はその常識を持たない男の非常識な行動が原因で人間、  
魔族問わず巻き込まれていく。

自重？なにそれおいしいの？を合言葉に好き勝手書きます

ギャグやらバトルやら悪知恵やらいろいろ詰め込むつもりですが、  
なにぶん初投稿なのでいろいろ不手際があると思います。それでも  
良いという方はどうぞご覧ください

## 第一話 千本ノックと閃光魔術

なんかいきなり目の前が真っ白になった。

何だよ誰だよいきなり俺の目の前で閃光手榴弾破裂させた奴、  
スタングレネード

こないたいけな一般人に非常識なもん使っんじゃねえよ

ちよつと豪華客船に潜入して乗組員簀巻きにして海に放り投げたり  
スニッキング  
半殺しに

したくらいで大げさすぎだろーが、もうちよつと常識ってもんを考  
えろよ。

やった奴出てこいよ千本ノック（守備位置バッターとの距離3M以  
内）で根性

叩き直してやるからよ、

とかなんとか考えてたらようやく視界が回復してきた。

さあて、どんな仕返しがいいかなあ。

少しずつ視界が開けていく中、俺はそこでふと視覚以外の五感で違和感を感じた。

おかしい

さっきまでしていた潮の香り、波の音が消えている

肌を感じていた風もいきなりやんだ

自分は間違いなく船の船首甲板にいたしここは海のと真ん中だ

突然船の揺れが止まるはずもない。

どう考えてもおかしい

有り得ない事態に本能が警鐘を鳴らし即座に行動できるよう体勢を整え

周囲への警戒レベルを最大まで引き上げつつ視力が回復するのを待った。

そして視覚が完全に回復してその違和感は決定的になった。

「は？」

隣から間抜けな男の声が聞こえた

なぜかそこは船の上ではなく石造りの大きな部屋の中央だった。

「な、なんだ、何が起きたんだ！」

隣の男が騒ぎ出す

身なりからして高校生くらいか

ぱっと見かなり整った顔をしている

身長は170位、スマートっていう言葉が良く似合う体格をしている

少なくとも女に困ってることはないな

きつとぼけた顔しながら何人も泣かせてきたんだろう

こいつがさっきの閃光手榴弾スタングレネードの犯人だろうか

おそらくこいつが犯人だろう

いや、こいつが犯人に違いない

てゆうか犯人ということにしよう

よし、あとで閃光つながりシャイニングウイザードで閃光魔術をかましてやろう

ついでに額に油性ペンで巨乳と書くことも決定だな

べ、べつに私情で犯人で決め付けてるわけじゃないんだからね!!

まあそれはいいとして（後でやるから）

問題はこいつらか

そう思いつつ部屋の壁伝いにぐるりとこちらを囲んでいる集団に目をやった

なぜか全員中世にタイムスリップしたような格好をしている

全身を覆う鎧を着て槍や剣を持つ兵士達

絵画から抜け出てきたような貴族風の男女共

きわめつけは

「ようこそ勇者様」

高そうなティアラを頭に付け金持ちがでかいパーティでしか着そうのない

ドレスを着たいかにもな王女サマっぽい女だった。

## 第二話 何事も礼儀は大切です

「は、はい？」

隣の男がわけが分からないという顔をしながら王女サマっぽい格好をした女に顔を向ける

「初めまして勇者様、私の名前はエクレール、エクレール・フォン・バイムと申します。ここ」

バイム王国の第一王女でございます」

「ぼ、ぼくは鷺沼英人さぎぬまひでとといいます・・・で、ばいむ？聞いたことない国

ですけどそれってどこにある王国なんですか？」

「ご存知ないのも仕方ありません、ここはあなた方が居た世界とまったく違う世界で・・・」

「え、ええーーーー！！それはいったいどういうこと・・・」

「それは・・・」

横でやってる会話に適当に耳を傾けつつ、俺は周囲の状況を確認していた

周囲の人間の数はざっと見4〜50人はいるがこちらとは距離をとっている。



近づいてきたのは王女サマのみか、

地面には魔方阵っぱい模様があり俺と鷺沼とかいう男はその中心にいた

「つまりこの世界には魔神を頂点とした魔族っていうのが人間の生活を脅かしている？」

「はい、そしてその魔族の脅威から我々を救ってくださる勇者様があなた方なのです、

どうか力無き私たちの希望の光となってくださいませ」

「い、いきなりそんなこと言われても」

大抵こういう奴は結局引き受けるんだよな、んで魔王だか魔神だかを殺ったあと

「姫・・・」「勇者様・・・」とかいつてくっついてハッピーエンドって流れが王道だよな

けどまあ現実はその甘くなさそうだとぞ

でもいまの俺はそんなことどうでもいいくらいの重要な問題が発生し、人知れず頭を抱えていた。

腹減った

そつういあ今日ろくに喰ってねえや

せっかく豪華客船に乗ったのにせいぜい見たのはパイナップル（手榴弾）くらいか

まあフルーツは食いたくない気分だったから投げてくれた人の口の中に

丁重にお返ししたけどな（トルネード投法で）

なんかえらいさわいでたなあ、そんなに俺の丁寧な対応に感動したんだろうか

感動しすぎて爆発してたしな、感動は爆発だ！っていう人なんだろう  
礼儀は人間関係を円滑にする重要な要素だからな、俺ほどの人間だと

学ばなくとも自然とできてしまうのだよ

しばらく二人の会話が続けていたが

「わかりました、できるかぎりやってみます！」

という勇者サマの一言で場に歓声が広がった。

「おお」

「なんと凛々しい」

「これで世界は救われる！」

てな具合にね

ふむ、んじゃまあ場もいい頃合だしそろそろこいつらの本性暴く  
しますかね

「ひとつ聞きたいんだが」

今まで沈黙を続けてきた俺の言葉に少し驚いた表情をしながら鷺沼  
とかいうのと王女が

こちらに視線を向けた

ていうかこいつら俺の存在に気づいてたのか

無視されてるからまったたく気づかれてないのかと思ってたぜ

「俺たちを元の世界に戻せるのか？」

俺の一言で場が静まる、そして一部の人間から俺へと向けられる強い一つの感情

あ、感じる！ワタシ、感じちゃってる！！（殺気を）

こ、こんなにたくさんの人から感じちゃうなんて！！（殺気を）

く、くやしい！でも感じちゃう！！（殺気を）      ビクンビクン

王女はさつきとはうってかわってなかなか言葉を発しない

「そ、それ「もちろんですとも!!」」

王女の言葉を遮る馬鹿でかい声の主はそういつつこちらに近づいてきた

「あなた方をもと居た世界に帰すこと、これは当然できまする、  
ですがそれにはしばらくの月日が必要でございます、

異世界の扉を開けるには色々準備が必要です、

申し遅れました、私はここバウム王国の大臣をしているものでございます」

そう言つて深く頭を下げてきたメタボ爺さん、（名前名乗ってただけ  
ど忘れた）

「もし勇者方様がご帰還を希望されるのであれば、残念ではございますが元の世界へ

お送りいたします、ただ先程も申しましたように異界への扉を開ける  
るには

有る程度の時間が必要でございますのでその間は王国で貴賓待遇で  
応対

させていただきます」

「へー」

つまり帰す方法は無い、そして断るなら還す（土に）ってことです  
ね、分かります

さあてどうしようかな

### 第三話 イケメンの顔は潰す為にある

というわけで、やってきました玉座の間

目の前にはロープレでよく見る玉座に座っている王冠がぶつたひげもじゃジジイ

そして部屋にはさっきの取り巻き共もきている

ちなみにさっきの姫さんはジジイの横にいる

「おぬしらが召喚された勇者か」

された、じゃなくててめーらがしたんだろうが

なんて本音は当然言うわけも無くここでも俺は黙っていた

「はい、私は鷺沼英人といいます、この世界の平和のためできうる限りのことを

するつもりです」

俺が黙っている理由は二つ

ひとつはこういう堅苦しい空気が嫌いだから

こういうところはイケメン君に喋ってもらってたほうが絵になるだろう

「うむ、よくぞ言ってくれた！おぬしの活躍に大いに期待しているぞ」

そしてもうひとつは俺がシャイボーイだからだ

こんなたくさん人が居る中でなんか話すなんてめんどk・・・

シャイな人間にできるわけじゃないか、初対面の人には恥ずかしさの余り

もれなく目潰し、金的、延髄蹴りをしてしまう俺には難易度が高すぎるのだよ。

というわけで王様へのお披露目もすんだのでさっさと部屋を出

「では10日後に早速魔神の住む魔神城におぬしらをつれていくので準備しておくように」



ようとして足を止めた。

ん、んん？今このジジイなんつった？10日ゴ？マジンスムシロ？

「え、ええ！いきなりですか！？」

イケメン君が驚く、無理も無いな、ロープレで言うなれば剣すら持つてないレベル1の状態で

ラスボスに挑んで来いと言われたようなもんだしな

「む？もしやまだ説明しておらんかったか？」

「初めて聞きましたよ！！」

「そうかそれはすまなかった、なに、心配はいらぬ、何も魔神を倒してこいといっているわけではない」

長々とジジイの説明が続いたのでまとめると以下のようになる

・召喚された人間が魔神城に漂っている魔力に触れるとなにやら強い力が目覚めるらしい

・目覚める力は人によって違うのでどんな力かは目覚めてみないと分からない

・この世界の人間が魔神城の魔力に触れてもなにも起きない

・魔神城には特殊な魔法具を使って俺たちだけを瞬間移動させるらしい

・一定の時間（説明からして約1時間程度だと思う）が経つと自動的にこちらに帰ってこれるらしい

・城にいつでも魔族と戦ったりする必要はまったくない

・魔族に遭遇しても召喚されたばかりの人間には不思議な力が働いており、あちらは手出し

できないらしい　ただしこちらがあちらに手を出すとその効果は即失われる。召喚されてから

約15日経っても効果は失われる

・すぐにあちらにいかないのは、まずこの世界の空気を体に馴染ませてからでないとあちら

の魔力に触れた瞬間、体がやられてしまうかららしい

つまり行つて特に何もせず帰つて来いって事らしい

説明が終わり、今度こそ部屋を出た

イケメン君は姫さんに呼び止められなにやら話していた、おそらくすでに堕ちているんだろう

ああいうのは何もせずとも女を墮とすからな、天然のジゴロって奴だな、恋愛ゲームの主人公

によくあるタイプ、隙を見て今度顔を潰してやろう。

その後なんか個室に案内されたのでそこで用意した食事を使った後、俺は考えていた、

んー、なんか今日一日色々あったけどどうしようかなあ、

丁度あつちの世界は色々めんどくさくなってきたんだよなあ

この世界魔法やら何やら色々おもしろそうだよなあ

もとの世界には多少心残りはあるけど、本当に少しだけだしなあ

具体的には来週の週間少年本読んでおきたかったとかアレやそれ系

の本処分しておきたかった

とか俺の属性が分かってしまっあんなDVDを処分しておきたかったとか

まあ帰る方法も探せばあるだろうけどここで生きていくのも悪くなさそうだし

一丁がんばってみよう！

さて、取りあえずは10日後に魔神城に行くんだけど・・・

せっかくこんな序盤にラスボスの城にいけるんだし、ただ行くだけじゃあつまんないよなあ？

よし、挨拶代わりに“お掃除”をしてあげるとするか

そうと決まれば明日からさっそく行動開始だな、10日の間に色々準備しておくしよう

うーん、俺ってなんてやさしいんだろう

聖人君子も俺には及ばないだろうな

そのときその部屋に誰かがいたら、間違いなく背筋が凍り、恐怖で心臓が止まっていただろう。

蛇に睨まれた蛙のようなかわいいものではなく、

それこそ魔神に睨まれた何の力も無い子供のように

それほどに彼の表情は

冷酷、冷血、冷徹、残忍、残酷、残虐、極悪、非道、すべてを孕んだ満面の笑みをしていた

「さあ人生を楽しもう」

#### 第四話 世界は矛盾とシンデレラでできている

とりえず次の日、来るべき“お掃除”のために色々と準備するため町にやってきました

そうそう、めんどくさくて（書くのが）色々説明してないことがかなりあるので  
（の文字はなんだろうね、目の錯覚かな？）

今のうちにしておこう

まずこの世界の名前はウルジアというらしい

金の単位はG<sup>「ゴールド」</sup>

文化はまさにロープレな中世的かんじ

武器や防具が普通に売られており、ごつい鎧着た人がガチャガチャ音を立てながら歩いていたり

弓持った狩人みたいな人もいる。

市場もあり少なくともこの町は活気があるようだ。

おばはんが大きな声を出しながら売り物の果物っぱいものを行きかう人にアピールしてたり、道具屋っぱい人が自分の薬っぱいのを

客に説明してたり、あっちこっちでワイワイガヤガヤと喧騒が聞こえる。

さて、ではこの世界の肝となる部分を説明しよう。

この世界の生物はワーク（以下WK）と呼ばれる潜在的な職業を持っているらしく、

俗に言う「ジョブ」とはまったく別のことを指している、

この世界での「ジョブ」とは、その人が就いている職業の事を指すこと

に対しWKはその人が持つ潜在能力がどんなものを分かりやすく職業で表したもの、という感じ

例を挙げてみよう

商売大好きで商人になったがその人のWKは戦士系だった

その場合、その人は戦士系の才能である力や体力に大きな可能性を持ち、逆に

商人として必要な計算や話術等の才能はあまり見込めないということだ

つまり商人としては大成しにくいということである

ただそれを分かっているがらこの人のようにWKとジョブがちぐはぐな人が

けっこういるのだ。

まあそれには理由があるのだが後で説明する。

話がずれたがこのWK、結構深くできているらしい

まずWKはランク制になっているらしい

C B A 特A S 特Sというのを基本としているのだが

Cが一般的な職でAから上のWKはめったにいない、

ということ以外未知数らしい。

何しろ才能というものはそれこそ千差万別、人の数だけ存在するのだ。



現在確認できているWKだけでも軽く3万は超えているが、  
(そのうちのA以上で確認できているのは1割満たない) 未確認WKの

情報もかなりあるようで

総数は全く把握できないらしい。

しかも同じWKを持っている人でも成長や特徴がまったく違ったりもする

さっきの戦士を元にロープレ風に例を挙げると

WKが同じ戦士系でジョブも同じレベル20のA、Bがいるとして、

Aは力が高いが技術が未熟、

Bは力は弱い、技術に長けておりAの使えない技も使える

と、こんな風にまったく違うタイプの戦士がいたりする。

つまりWKは文字どおり人の数だけ存在し、且つ同じだったとしても一人として同じ能力、成長ではないのであくまで目安程度にしておくとよい、ということになる。但し特定のWKやジョブでしか覚えられない技や魔法もある

さて、では次にそれだけ大量にあるのにどうやってランク分けをしているのか?ということになる

答えは簡単で、道具、ていうか石を使えば良いらしい

「ハロー石」と呼ばれるもので、結構一般的なものらしくこれを両手で握り締め、約2分待つと石の色が変化するので、その色で判断できるらしい。

未確認のものもこれでランクの判別が可能。

C 白 B 黒 A 銅 特A 銀 S 金 特S 虹

とこんな感じらしいのだが例外として、このランクに入らない特殊なWKが2種類存在する。

1つは犯罪者、これは犯罪を犯した人に追加されるWKでこれを所持している間は、人間としては扱われず、法により守られることも無い、

且つ犯した罪によって大小の賞金がかけられる。

これを消去するには自身にかけられた賞金の倍額を専用の施設に納めなければならない。尚、これを所持している間ハロー石はその人の元々所持しているWKに関係なく必ず灰色になる

もう1つは固有WK、これは極めて稀なWKと認められたものである種族しか持たない、特殊な育ち方をした等、普通の方法では付くことがないWKである。このWKはものによっては特Sを超えるもの

もあるらしい。又、このWKの場合ハロー石は上記以外の様々な色に変化する。

方法、といったのはWKはその人の鍛錬や思想、生き方によって後天的に変わることがあるのである

CからBに上がったりもすれば、逆に下がったりもする同ランクの全く違うWKになったりもするらしく、その際WKの名称も当然変化する。

魔法使い 賢者 戦士 商人のように

つまり最初の例にしたW Kが戦士系の商人も後に

W Kが商人系に変化する可能性がある、ということである。

例の商人のような人はこれを期待しているのだ、

もちろんそうでない物好きもいるだろうけど

もつとも、全く違うW Kになるには、ランクを上げるのと同じくらいの時間と鍛錬が必要になるらしい。

ただ、ランクの変化にも個人差があるので、

あつけなくランクが上がったり変化したりもすれば、どれだけ鍛錬しても

現状のままという人もいる。

ランクが上がると潜在能力の限界値と能力の上昇率も上がるが、能力自体が上昇するわけではないので、必ずしも高ランク所持者が低ランク所持者より優秀とは限らない。

そうそう、俺らが召喚された理由もこのW Kにあるらしい。

召喚された人間は例外なくW Kが初期から高位らしく、

且つ、ランクアップも極めて早いらしい。

だが、以外なことに今までに「勇者」というW Kを持った

人間はいないようで、戦士系や魔法使い系の上位系統が

ほとんどらしく、そのW Kに合わせて仲間やジョブを決めていたそう  
うだ。

ちなみに「アンサー」という魔法を使えば、その人の

W Kやジョブが分かるらしい。

ただ、召喚された人間は力を目覚めさせないとW Kとそのランクが分からないとのこと、魔神城に行くのはそのためらしい。

そしてジョブを変更する方法はW Kよりも簡単で、一般的にはレキ符という道具を使う。

使い方はなりたいたいジョブを書き、ハロー石と同じく両手で2分包む、すると裏にそのジョブなるための条件が書かれるのでその条件を満たせばいいが、条件は人によって全く違う。

ただしレキ符を使ってもなれないジョブもある、その場合は、何か別の条件を満たす必要がある。

（なれないジョブを書いた場合レキ符には何も書かれない。）

ジョブのほうにも固有のものがあ、ある種族にしかれないものや、

大きな活躍をしてなったりする、だがW Kほど総数は多くない。

（ジョブ自体の総数がW Kより遥かに下回るのが理由）

ジョブのランクは

一般職    上級職    最上級職    例外固有職

となっており上にいくほど能力に高い補正がかかること  
ちなみに一般職からいきなり最上級職にクラスチェンジ  
することは不可能。

あと、自分が装備できる武具はジョブによって決まっている。  
戦士系のW Kを持っていたても、ジョブが魔法使い系なら  
魔法使いの装備できるものしか身につけられない、  
ということである。

長々と説明してしまったがこれを聞いた大抵の奴はこういうはずだ。

なるほど、わからん！！と

心配するな、俺もわからん。

まあそんなのがあると思ってくれてればいい。

長すぎて何言ってるか分からなくなったりしたしな。

矛盾とかあっても、それは俺が間違えて覚えたことだろうから気にしないように。

なぜなら世界は矛盾で満ちているのだから。

と、締めたところで説明はここまでにしとこう。

あとは追々していくので楽しみにしておくように。

さあ買い物買い物

べ、別にめんどくさくて投げたわけじゃないんだからね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4287z/>

---

さあ人生を楽しもう

2011年12月19日19時49分発行